

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	大木 美乃
主 論 文 題 名： 近衛家実詩壇の研究				
(内容の要旨) 本論文は、鎌倉時代の近衛家実の詩壇を明らかにしようとしたものである。鎌倉時代、詩会が多く開かれていたにも関わらず、詩会での作品が残ることは少ない為、当時、詩会においてどのような作品が詠まれていたのかを知ることは困難である。 後に猪隈関白と呼ばれた近衛家実は、当時頻繁に詩会を開き、一つの詩壇を形成していたことを窺える。家実の主宰する詩会において詠まれた作品が、陽明文庫蔵『猪隈関白記紙背詩懐紙』である。『猪隈関白記紙背詩懐紙』とは、家実の詩会にて提出された詩懐紙である。 まず、『猪隈関白記紙背詩懐紙』全体像を把握する為に、そこに含まれる断簡の復元作業を行った。『猪隈関白記紙背詩懐紙』には、句題詩と無題詩の両方が含まれている為、それぞれを分けて復元する必要がある。 句題詩を復元する場合、形式面として韻字や平仄の中でも特に粘法の一致が手掛かりとなる。内容の面では、頷聯・頸聯の破題しているであろう表現と詩題との関わりが手掛かりになる。加えて尾聯の述懐が詩会の様子を述べている場合には、それも手掛かりとなりうる。 無題詩を復元する場合、形式面において、句題詩と同様に平仄の粘法が二紙を同定する際の手掛かりとなる。もう一つの手掛かりとなるのは、勅韻である。勅韻とは、無題詩の詩会において、用いる韻字とその順を予め決め、詩会の出席者全員がそれを用いて作詩することを言う。これにより、詩題を闕とする作品においても、同じ詩会で提出された作品を見つけることが出来、詩題を推定することが可能となる。本論文では可能な限りの復元を行った。 次に、近衛家実詩壇の出席者や、詩の表現を検討した。まず、詩の作者について、家実の兄弟や、母方の村上源氏出身、平氏、菅原氏、大江氏、藤原式家などに分類し、出自や近衛家との関係を検討した。近衛家の関係から検討すると、家実の縁戚や、家司層出身の者がその殆どを占めていたことがわかる。出席者と家実の関係は、非常に緊密なものであったと指摘出来る。 続いて、詩の内容解釈において、主として表現の典拠・用例という視点から考察した。まず、鎌倉時代、「四部ノ読書」と言われた幼学書の享受を考察した。幼学書の中で、作詩に大きく関わった『百二十詠』『蒙求』『和漢朗詠集』について具体的に詩に反映されている表現を確認した。『百二十詠』の場合、句題詩の破題に関わる部分にその詩句が用いられている。このことから、『百二十詠』は句題詩の破題をするに当たり、非常に重要であったとわかる。『蒙求』では、句題詩の破題や述懐に標題の一部或は全てが利用されていた。自身の心情を『蒙求』を用いて表現するのは、出席者全員にその故事が理解されていることを示す。つまり、『蒙求』の知識が当時の人々の間に深く浸透していたのである。『和漢朗詠集』は、句題詩の詩題や首聯、破題に関する表現の他、無題詩にも用いられていることを確認した。多岐にわたる利用は、『和漢朗詠集』				

が作詩するに当たり重要な書物であったことを示す。これを通じて、幼学書の知識が儒者に限らず皆に浸透している状況や、その利用の仕方の一端を明らかにした。

そして、前代に成立した『本朝無題詩』『法性寺殿御集』を中心に、その受容について句題詩、無題詩の双方から考察を行った。いずれにおいても、その表現が『猪隈関白記紙背詩懷紙』の作品の中に積極的に取り入れており、その最初の受容例として位置づけることが出来た。また、出席者の詩の表現から、『本朝無題詩』や『法性寺殿御集』を編纂した忠通の文学的活動を強く意識している様子を窺えた。忠通の歌壇を構成していた人物と家実の詩壇を構成する人物は、どちらもその主宰者にとって縁戚や家司層であった。この一致も、家実詩壇の意識に拍車をかけたと考える。

加えて『猪隈関白記紙背詩懷紙』の詩の表現において、同じ詩題を有する作品同士に重複する表現が見られることを指摘した。それらは、句題詩の破題に関係する部分で重複している。同時代に成立した破題の為の対句語彙集『文鳳抄』・『擲金抄』とその表現の比較検討を行った。これにより、重複する表現が生じた背景には対句語彙集が存在する可能性を指摘した。また、後代に成立した『近衛兼教一筆五部大乘経』についても、対句語彙集利用の可能性を指摘した。

これに続いて『猪隈関白記紙背詩懷紙』以降の紙背詩懷紙二種について整理し、作者や詩の典拠・用例を考察した。

まず『拾芥抄紙背詩懷紙』に残された作品を翻字し、懷紙の作者や詩の詩風を考察した。作者には、藤原南家出身者が多く確認され、詩懷紙が提出された詩会は、出席者にとって私的な文事であったことを確認した。次に、『本朝世紀』紙背詩懷紙に残された作品を翻字し、懷紙の作者や残された詩について考察した。この詩懷紙の作品を書写した本が存在し、その書写した内容と当該詩懷紙を比較し、底本の本文に阙けていた部分を補い、校訂本文を作成した。作者については下級官人の小槻氏出身者の名前が多く確認出来た。本詩懷紙もまた彼らを中心とした私的な文事において提出された作品である。残された句題詩には、独自の構成方法が守られており、『白氏文集』や幼学書を典拠・用例とする表現を見出した。これにより、後代における句題詩の姿を窺うことが出来た。

本論文では、『猪隈関白記紙背詩懷紙』について作者や詩の内容解釈における典拠・用例の検討等、多角的に分析を行った。これにより、家実詩壇の一端を明らかにすることが出来たと考える。

Thesis Abstract

No. _____

Registration Number:	<input type="checkbox"/> "KOU" <input type="checkbox"/> "OTSU" No. *Office use only	Name:	Yoshino Oki
Title of Thesis: A Study of Konoe lezane's poetic circles 近衛家実詩壇の研究			
Summary of Thesis: <p>This paper tried to clarify Konoe lezane's poetic circles in the Kamakura period. In the Kamakura period, Konoe lezane who was later called Inokuma Kanpaku actually seems to have opened a poetry society frequently. The work which the poem presided over by lezane was celebrated is the collection of Yomei Bunko "Inokuma Kanpakuki Shihai Shikaishi (猪隈関白記紙背詩懷紙)". "Inokuma Kanpakuki Shihai Shikaishi" is a poem coverlet submitted at the poems of the reality.</p> <p>First of all, in order to grasp the whole picture of " Inokuma Kanpakuki Shihai Shikaishi", I performed restoration work of the cuts included therein. Since " Inokuma Kanpakuki Shihai Shikaishi" contains both Kudaishi (句題詩) and Mudaishi (無題詩) , it is necessary to restore each of them separately.</p> <p>In case of Kudaishi, coincidence of viscosity is particularly a clue in rhymes and flatness as formal surface. In terms of content, the relationship between the expression and the poetry. In the case of Mudaishi., By these methods I restored as much as possible in this paper.</p> <p>Next, attendees of lezane's poetic circles and the expression of poetry were examined. First, regarding the author of the poem, it turns out that the relatives of the reality and those from the housekeepers occupied most of them. It can be pointed out that the relationship between attendees and the facts was very close.</p> <p>Subsequently, in interpreting the content of poetry, I considered it mainly from the viewpoint of the authority and examples of expression. First of all, during the Kamakura period, we examined the enjoyment of the juvenile books. And I focused on "Houchoumudaishi" and "Hossyoujidonogyoshuu" that were established in the previous generation, and examined the acceptance from both phrase poems and untitled poetry about their acceptance. In any case, the expression was actively adopted in the work of " Inokuma Kanpakuki Shihai Shikaishi ", and it was able to be positioned as its first acceptance example.</p> <p>In addition, I pointed out that in the expression of poetry of " Inokuma Kanpakuki Shihai Shikaishi ", overlapping expressions can be seen among works having the same poetry. This pointed out the possibility that a phrase lexicon might exist in the background where overlapping expressions occurred. I organized the two types of paperback poems " Shhuugaisyo shihai sigaisi" and "Hontyousieki shihai shigaishi" that were written after " Inokuma Kanpakuki Shihai Shikaishi ". I examined the author and the author's examples of poetry.</p> <p>In this thesis, I analyzed diversely about "Inokuma kanpakuki shihai shikaisi ", such as author and interpretation of poems. I think that we could partly clarify lezane's poetic circles.</p>			